

2021年9月5日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「主はわが牧者」

聖書：エゼキエル書34：1～11

エゼキエル書34章では何度も「牧者」という言葉が記されている。「牧者」とは、当時のイスラエルの政治家たちを指す。民を養うべき政治家。神は「牧者は群れを養うべきではないか」と迫る。戦争で国が崩壊する以前の政治状況を指摘し、養うべき国民に目を向けない、保身に走る政治家たちに対して、神は厳しく問う。

奇しくも先日、日本の総理大臣が自民党総裁選に出馬しないと発言した。総理大臣を辞めると言ったわけだ。発言の前日までは自信満々に出ると言っていたが、負けると分かった時点で出馬しない。保身に走ったのだろう。今の政治家に国民の一人ひとりの痛みに向き合う政治家がどれだけいるのか？

聖書は、今を生きる、前を向いて生きるためには、過去を忘れることではなく、歴史にけりをつけることでもなく、過去に目を閉ざさずに悔い改めをもって向き合うことであると記す。この過去に目を閉ざさずに悔い改めをもって向き合うことを大事にした大統領がいた。ドイツのヴァイツェッカー元大統領だが、彼はドイツの敗戦40年にあたる1985年5月8日に演説を行い、国民に対しナチス・ドイツの過去をありのままに見つめる勇気を持つよう求めた。…過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります…。

ヴァイツェッカーは2015年に死去するが、その年は戦後70年の年で、当時安倍首相の「戦後70年談話」が注目された。中国や韓国をはじめアジア諸国民に3000万人とも言われる犠牲を強いたこと、「慰安婦」問題に対して、「河野談話」や「村山談話」を継承するかどうか問われたが、結局その内容から大きく後退する。そして、もっとも批判されるべきことは、彼は「日本では戦後生まれの世代が今や人口の8割を超えています。あの戦争には何らかかわりのない私たちの子や孫、そしてその先の世代の子供たちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」と語った。ヴァイツェッカー元大統領とは真逆である。この国の行く末が不安だ。

最後に、《まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする》(34:11)。この言葉は神は、私たちの牧者であることの宣言である。ここで大事なことは、「主はわが牧者」であるとして“ああ良かった”で終わることではない。神は、私たちを探し出し、私たちの世話をす…すなわち、神が私たちに「お前はどこにいるのか、お前はそこで何をしてい

るのか」と問われているといことである。世話をすると仰る神に対し、私たちはただぼーっとしている訳にはいかない。神が、私に何を求めておられるのかと問われつつ、私に出来る主の働きを担わせて頂こう。「主はわが牧者なり」。(神谷)